

ラスキン誕生 200 年記念 「ラファエル前派の軌跡展」

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2019.03.14～06.09



「ラファエル前派同盟」は、1848年に「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ」（1828～1882）らにより結成されて、英国美術の全面的な刷新を目指して世の中に衝撃をもたらした。

この前衛芸術家たちの作品は、観る者の心に訴えかけて広く共感を呼び、思想的基盤が揺れ動く中で、芸術に大きな意義を見出した。

美術評論家「ジョン・ラスキン」は、この混乱期に精神的な指導者として、あらゆる人にかかわる芸術の必要性を説く一方で、「ラファエル前派同盟」と「エドワード・バーン＝ジョーンズ」や「ウィリアム・モリス」などの追従者たちに、偉大な風景画家である「J.M.W.ターナー」を関連づけて考察している。

本展は、19世紀の英国美術の発展に大きな影響を与えた「ラスキン生誕 200年」を記念して、英米の美術館が所蔵する「油彩画、水彩画、素描、ステンドグラスなど約 150 点」を展覧している。

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ 油彩/カンヴァス 1863～68年頃

《ウェヌス・ウエルティ・コルディア（魔性のヴィーナス）》部分（左上図）

画面前面の女性の胸像や背景のヴィーナスの花「バラ」、下部には「スイカズラ」が一面に描かれている構図は、ヴェネチアン・スタイルの延長上に捉えられるべき作品であることを示している。



ターナー 《カレの砂浜 一引き潮の餌採り》 1830年 油彩/カンヴァス
水平線から上がる太陽と引き潮の浜辺で、潮干狩りをする人たちを大胆に描いた作品は、画伯の特徴である“オレンジ色”が海面などの画面を支配しているのが特徴の絵画作品である。（左上部）

レイトン 《母と子（サクランボ）》 1864～65年頃 油彩/カンヴァス

優しい時間がゆったりと流れて、母と子供の会話が聞こえてきそうな眼差しと、心地良く整えられた優雅な調度品が、なんとなくその場にいるような安らぎを与えてくれる作品である。